

琉球の抄造紙

著者	系数 兼治
雑誌名	沖縄文化研究
巻	3
ページ	173-208
発行年	1976-07-28
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015512

琉球の抄造紙

糸数兼治

島津侵寇と技術導入

琉球に製紙技術がもたらされた要因の一つは、万曆三十七年（一六〇九）の島津侵寇にあったと思われる。すなわち『球陽』⁽¹⁾尚寧王の条に「附記」として記すところによれば

我国土瘠産少国用不足、故与朝鮮・日本・暹羅・瓜哇等国、嘗行通行之礼、互相往来以備国用、万曆年間、王受兵警、出在薩州、時王言、吾事明朝、義当有終、日本深嘉其志、卒縦回、自爾而後、朝鮮・日本・暹羅・瓜哇等国、互不相通、本国孤立、国用復欠云々

とあり、島津の兵警を受けて以後、薩州以外の諸国との通商が全く禁止された。万曆三十九年（一六一一）に示達された掟十五条の中に

一 薩州御下知の外唐之詔物停止たるべき事

一 薩州より御判形これなき商人許容有るべからざる事

一 琉球より他国へ商船一切遣らる間敷き事

とあり、琉球の通商貿易にきびしい制限を加えていたことが知られる。

このため「蔵方を始諸士末々当用之品々專御当地(薩州)より誂下事」⁽²⁾となり、深刻な財政危機を招き、一六四五年には王府の借債四万余両に達したという。⁽³⁾

こうした島津侵寇以後の窮迫した事態を打開するため、各種生産技術の導入開発を積極的に推進奨励する必要があったことは容易に推測される。商品の輸入から直接生産にきりかえることにより大いに王府の財政負担を軽減できるからである。乾隆五十一年(一七八六)に成文化をみた『褒奨条例』⁽⁴⁾の一節に次のごとくある。

御当国ニ無之品始而丈夫ニ仕出御為ニ相成、世上之重宝ニも罷成候者は、吟味之上七八年も相過先様国用ニ可相立儀候へ、士は位或名嶋品に依て地頭をも被下、無系之者ハ右ニ準御見合可有之事

褒奨の事はふるくから慣行として行なわれており、これに先行するものとしては、雍正十年(一七三二)に『褒美物規模』が制定されている。後に見るごとく技術者の多くは「無系之者」(平民)であり、彼等が心力をつくして諸技術の開発導入に取組んだ背後には、この種の褒奨規定が大きくかかわっていたことは否めない。製紙をはじめ、染色・瓷器・養蚕・木棉・造筆・蠟燭・造塩・黒糖・浮織・漆器・焼玉等の主たる技術の導入が、ほとんど島津侵寇以後の百年間に集中しているのは注目に価する。

杉原・百田紙を漉く

琉球にはじめて製紙技術を伝えたのは関忠勇（大見武筑登之親雲上憑武、のち北谷間切嘉手納地頭職に任じ、嘉手納親雲上と称す）であるとされる。康熙二十五年（一六八六）のことであるという。『球陽』附卷尚貞二十七年（一六九五）の条に「関忠勇始造球紙」として次の記事がある。

康熙丙寅（一六八六）関忠勇（大見武筑登之親雲上憑武）往薩州、乃從草野氏学造紙之法、悉尽其法而帰来、後造杉原・百田紙等以備聖覽、至甲戌年（一六九四）奉命為造紙長（俗曰主取）恆於自宅製造球紙以供国用、乙亥（一六九五）命賜宅地于首里、移居金城邑大桶川辺、以為造紙、我国造紙、自此而始⁽⁵⁾彼はもと那覇の平民（無系）であるが、製紙の外、糸綿・煮螺等の法を伝えた功により士分に取立てられた。

那覇関忠男（嘉手納親雲上憑武）前為北京宰領、赴福州時、遭海賊、身受劍砲、漸凌其難、入閩赴京、亦遭闖乱、逗留蘇州、伝授製造糸綿・白糸及煮螺等帰回本国、遍教于人、且赴薩州伝授製紙法而帰来、始製紙于本国以備国用、由是深蒙褒嘉其功、恩賜家譜以登仕籍⁽⁶⁾

『新参揚姓家譜』に「康熙三十八（一六九九）己卯四月、因請記録之訟、申口衆僉議書達上聞、遂願望、家門之栄幸也、右僉議書左記焉」として次の記録がある。

僉議

大見武筑登之親雲上

右先年北京宰領ニ而渡唐之砌、逢海賊手疵迄負相働漸其場を遁候処、大清乱世之時分ニ而蘇州江長々罷在御奉行首尾能相勤候、其後綿子白糸之拵・煮貝之致様伝受仕、久米嶋并貝摺師江稽古為仕候、紙漉杯茂於魔嶋稽古ニ而罷下、當時御用相立候間、家譜相記永々讓渡ニ仕度由申出候、依之僉議仕候者、右之段々国用相立永々重宝可罷成候、且又康熙廿壹（貳の誤か）癸亥年（一六八三）北京宰領ニ而渡唐、砂辺親雲上下知を以成程相働前代より取失候駅站与申路次銀十三取重御為宜ニ候、一節壹細工為相勤者ニ而候得共、御奉公之段々余人ニ相替候間、願之通御達被下可然哉与奉存候以上

四月八日

稻嶺親雲上

（以下七名連署）

技術導入の過程を明らかにするため関忠勇が紙漉主取となつて首里居住を命ぜられるまでを前記家譜によつて跡づけてみると次のとおりである。

康熙二年（一六六三、二十一歳）為壹細工

同 四年罹病辞壹細工

同 五年進貢船才府蔡氏小橋川親雲上由政（中略）、赴中夏之時、為四方目、到閩（下略）

同 六年接貢才府蔡氏桃原親雲上由政（中略）、赴中夏之時、為脇五主、到閩（下略）

同 七年蔡氏玻名城親雲上由政（中略）宰領唐買物、赴薩州之時、為荷付、到薩州（下略）

同 八年探船才府李氏当銘筑登之親雲上由全（中略）、赴中夏之時、為大五主、到閩（下略）

同 十一年進貢大唐船才府梅氏田名親雲上宗和（中略）、赴中夏之時、為大五主、到閩（下略）

同十二年三月進貢使向氏名嘉真親雲上朝衆（中略）、赴中夏之時、為北京宰領、赴閩、三月十八日到于定海、賊船大小十三艘、自兩面來圍遶而攻擊、自辰時攻日中相戰負疵、幸免死、十一月十一日福州起身、甲寅（康熙十三年）正月到北京、已事赴於福州之道、到于江南時、靖南王叛（中略）道路難通、留滯蘇州四年、丙辰（康熙十五年）十月靖南王降矣、故得回福建、同八月歸國

同十九年進貢使毛氏識名親雲上安依（中略）、赴中夏之時、為北京宰領、到閩（下略）

同二十二年謝恩王舅毛氏池城親方安憲（中略）、赴中夏之時、為北京宰領、到閩、次年二月福州起身、到於杭州、白糸挽拵・縮緬織煮事等、因安憲之命、致稽古（下略）

同二十四年航于久米島、以綿子・白糸之拵教授（下略）

同二十五年小唐船脇筆者武氏安座間筑登之喜昌、於八重山嶋破船揚物為宰領、赴于薩州之時、為荷付、到廳府、時欄寢八良右衛門殿・新納近江殿教于兩位小姓白糸挽拵方・縮緬煮調事、且依公命、杉原漣方、師草野五右衛門、伝授之

同二十七年進貢使毛氏福地親雲上盛命（中略）、赴中夏之時、為北京宰領、到閩赴京（下略）

同二十九年進貢使溫氏森山親雲上紹基（中略）、赴中夏之時、為北京宰領、到閩赴京、時到於揚州、学

煮貝之事（中略）

同三十二年以揚州貝之煮事、教授于貝摺主取神谷親雲上（下略）

同三十三年為紙漣主取（下略）

同三十四年蒙於首里居付之御免許、家屋敷拝領焉

これで見ると、彼は壺細工（陶工）を二年勤めたあと、旅役に転じ、通算九回（閩まで四回、北京まで五回）渡唐し、その間琉使の北京往還路にあたる杭州や揚州において必要な技術を伝授している。薩州へは二回航し、中国伝授の技術を教授するとともに草野五右衛門を師として紙漉の稽古にあたっている。ことに杭州における白糸挽拵・縮緬織煮の稽古が「安憲之命」によるものであり、薩州における紙漉稽古が「公命」（王府の命令）であったとする点が注目される。毛国珍池城親方安憲は時の三司官であり、王府の内命を帯びていたことは想像に難くない。このことは、帰国の翌年直ちに彼を久米島に派していることによっても知られる。

琉球に於いて、関忠勇以前紙が漉かれたかどうか興味ある問題であるが、『歴代宝案』万曆三十年（一六〇二）九月四日付符文・執照を見ると、その進貢物の中に「土白紙一佰束」とあり、康熙九年（一六七〇）十月十三日付礼部宛咨文には、正貢のほか「将土産縹烟伍拾匣・查紙貳万張（同日付福建布政司宛咨文には肆萬張とある）芭蕉布老伯正等物進上云々」とあって、これらはいずれも琉球産紙と解されるが、なお詳細は明らかでない。

杉原紙は例えば毎年正月元旦に行なわれる「御印披」（政治始めの儀式）の目録の書写料などに使用された形跡があり、『琉球国由来記』に「黄染杉原ニ認之、同紙ニテ上包目録ト書之」とある。百田紙は主に公用文書類の料紙として使われたものであろう。

芭蕉紙の開発

芭蕉紙は琉球の特産紙であって、一七一七年欽兆鳳・房弘徳・查王蚕・知念などによって共同開発されたものである。これに対して王府は銀二百両を下賜して造紙の器具を整備させるなど積極的な振興策を講じた。

首里欽兆鳳(祖慶筑登之親雲上清寄)・房弘徳(比嘉筑登之親雲上乘昌)・查王蚕(仲宗根筑登之親雲上真秀)・知念掟親雲上、皆是性巧過人、康熙丁酉年(一七一七)相議合巧、創造芭蕉紙、足以応国用、只愁造紙器具之未備耳、于是特賜銀子二百両、令備其器具、及設一宅于山川村、為造紙之所、併賜草房三個以勸之、自此公用不欠、遂伝其法于宮古・八重山・大島、又雍正甲辰年(一七二四)房弘徳、創造色半紙・広紙、其丙午年(一七二六)創造奉書紙・高檀紙・百田紙、其辛酉年(一七四一)創造藁紙、以供国用⁽⁸⁾

芭蕉紙の開発は、杉原や百田紙の原料たる楮木(カデノキ)の不足に起因するらしい。楮木の本格的な栽植がはじまるのは一八四〇年以降と見られる(後述)から、この頃までは主として野生のものが使用されていたのであろう。『球陽』尚益三年(一七二二)の条に「那覇翁能哲(富村親雲上盛友)、奉命到久米島、令彼人民用桑樹・榕樹・宇祖古等、製造楮紙」とあり、すでに楮皮にかわるものとして桑樹・榕樹(ガヂマル)・宇祖古(アコウ)等の樹皮が用いられている。宮古の属島多良間島から同蔵元(宮古政庁)の御問合方宛文

書に

当嶋之儀、百田紙漉出嶋用相達来候処、紙漉木之儀、毎年伐取又者皮者け取相用故候哉、漸々致情悴、紙漉出方差支候、右ニ付而芭蕉紙漉出方致稽古嶋用之分者相達度旨願出之趣有之、小横目平良仁屋横目御届兼務ニ而漉様稽古方申付差登候間、紙漉方江相付稽古仕候様、被仰付被下度、此段御問合申上候以上

戌三月六日

とある。「戊」は恐らく戊戌年（一七一八）であって、芭蕉紙が発明され、その製法が宮古・八重山などに伝えられた翌年のことと考えられる。『新参揚姓家譜』乾隆四十年（一七七五）の条に

乾隆四十年乙未七月、所製唐紙（これについては後で述べる）、因本朝楮樹欠乏故、以芭蕉紙為之地紙、惟官府之需、以百田紙製之、嘗所培植之楮樹者、今既繁盛、実堪其用、因此本年備由呈請、蒙准採取各処楮皮、製百田紙、以為其地紙、嗣後各紙所用之物料、全不待需于他国、自将本地出産者、足以弁理

とあって、楮樹の欠乏状態はこの頃までつづいていたらしい。芭蕉紙が新たに登場してきた背景には、このほか行政需要の増大が考えられる。すなわち王府の行政機構は前代の尚質（一六四八―一六六八）・尚貞（一六六九―一七〇九）の時にほぼ完備され、多くの役職の新設が見られる⁹⁾。旺盛な行政需要を楮紙だけではまかないきれなかったものと思われる。

芭蕉紙は、原料のイトバショウが豊富に存するところから大量に漉出され、広く国用に供せられること

となったが、一般に楮紙に比べて紙質が劣り、あくまで楮紙の代用紙として二次的に漉かれたにすぎない。したがって楮紙に全くとってかわることはなかった。房弘徳は芭蕉紙のほか各用途に応じた各種各様の紙を創造したが、この時点では輸入の「大和黑かち」を用いたとしても、おのずから原料に制約があるから特定需要に応じたもので広く公私の用を充たす程には至らなかったものと思われる。この時期の紙については、徐葆光の『中山伝信録』（二七二）によってその一端をうかがうことができる。

紙以繭為之、有理堅白者極佳、其黃色質鬆者、名事宜紙、皆切方幅為用、与高麗繭紙正同、其質厚者、染紫色可為衣、名曰内用紙、有印花者如綿、極可愛

「事宜紙」というのは、汪楫の『使琉球雜錄』（一六八三）に「國中紙有数、高麗者寬不踰尺、曰事宜紙」とあって朝鮮からの輸入紙であるらしい。内用紙・印花紙と称するものも同様輸入紙であろう。『大島筆記』（一七六二）に「紙、漉者なし。伝信録に繭紙を琉球の名産とすと云えるを質せるに繭紙決して琉球より出ず、福州にて調る由云えり」とあるのは実情を伝えていない。繭紙というのは、実は楮紙であって「以繭為之」とあるのは単なる文飾にすぎないようだ。楮皮の繊維を十分に叩解を行わずにそのまま漉込むため、その粗い繊維の部分が光って、ちょうど蚕の繭のように見えるところからこの名があるといわれる。⁽¹⁰⁾「有理堅白」（すじがあり、かたくて白い）なるものが、百田紙などの楮紙を指したものとすれば、徐葆光が手にしたものの中には琉球産紙が含まれていたのかも知れない。芭蕉紙にはふれていない。前記『使琉球雜錄』に

国人無貴賤老幼、遇中国人稍相浹洽、必出紙乞書、不問其能書与否也、國中紙有数、高麗者寬不踰尺

曰事宜紙、亦有絶佳、似宣徳紙・鏡面箋之類、皆不以属客、必購中朝毛辺紙（福州に産する竹紙）以求

（書）名曰唐紙、乞使臣書恭謹得之、輒俯身搓手高拳、加額焚香而後展視、其見重如此

とあつて、これから推すと徐葆光の手元に集まつた紙も上質の輸入紙がその大半を占めていたのである。なお徐葆光には「球紙詩」と題する七絶があるがこれも琉球産紙とは解しがたい。

琉球繭紙扶桑蚕

十華搗就藏龍龜

一縑一紙購不得

島客求書致滿函

冷金入手白於練

側理海濤凝一片

昆刀裁截徑尺方

疊雪千層無幕面

我毫弱似痴凍蠅

寒光耀腕愁凌氷

捲疊空箱加什襲

携歸到剡誇溪藤

（注）冷金は朝鮮紙名、剡藤紙は剡（浙江省紹興府）の若耶溪に産する藤の皮の纖維で作った紙

紙座の設置

道光二十年（一八四〇）王府は、一時中断しかけていた百田紙の再興を企図して首里宝口に宅地を租借（一八六六年公有化）⁽¹¹⁾して王府直営の紙漉場を建設し、三胥役を入直せしめ、金城村百姓比嘉筑登之親雲上をしてこれが製造にあたらしめた。しかるに「未見善美」使用に堪えないとのことで、道光二十六年（一八四六）那覇泉崎村金城筑登之を薩州へ派遣し百田紙等の製法を改めて伝授せしめた。

此年（一八四〇）始在宝口租借宅地、造作茅屋、以為製百田紙之区、至道光二十三年（一八四三）癸卯七月、改造瓦家長五間横三間、而附廂一所長三間横三尺、随設三胥役、入直掌製紙之事⁽¹²⁾

本国在昔、有製出百田紙之類、至中葉其製断絶、幸有金城村百姓比嘉筑登之親雲上者、自尽工夫復作其製、于是朝廷、於上届子年（一八四〇）構屋于宝口、以為製之区、而使該比嘉製作百田紙、尚未見善美、於上届丙午年（一八四六）泉崎村鄧氏金城筑登之順応、前赴薩州、學習製紙、得以回国、厥後令該金城親在紙座、試製上紙・下紙・百田紙・美濃紙・宇田紙・杉原等諸色、惟徐杉原紙外、其余諸色皆見善美、而至楮木亦自上届子年（一六四〇）以来行令國中、致栽植、現今茂盛可見永世保製之益、由是朝廷、即許嗣後將所用言上紙及諸座所用諸色紙、都使国製・只是杉原紙一色、待其製就美之際、揣公務輕重、以為使用焉⁽¹³⁾

ここに楮紙は空前の盛況を呈し、一八七五年（明治八）進貢・接貢両船より中国にもたらされた百田紙の量は都合二六三〇束（一束は四〇〇枚）程にも達している。⁽¹⁴⁾

紙座の設置年については、明確な記録がないが、右の引用文中に「道光二十三年……設三胥役入直掌製紙之事」とあるのをその設置年とみてよいと思う。『琉球藩雜記』⁽¹⁵⁾（明治六年、大蔵省調）及び同付表によると、紙座は所帶物奉行所の所轄に属し、その構成は主取一名筆者二名加勢筆者十二名紙漉人八名となっている。加勢筆者は臨時職であるからこれを除いて考えると三胥役は主取一名筆者二名のこととなる。

楮木の栽植

楮木については、前記引用文中に「上届子年以来行令國中致栽植云々」とあって、原料の確保には特に意を用いたことが知られる。『沖縄県旧慣地方制度』（明治二十三年、沖縄県内務部第一課）によると、南風原・大里・高嶺・東風平・具志頭・真壁・摩文仁・喜屋武・知念・浦添・北谷・読谷・勝連・与那城・具志川の十五間切（現在の村）に「楮木当」（カデキアタイ）が置かれその職掌は「地頭代ノ指揮ヲ受ケ楮木ノ栽植伐採取締一切ノ事ヲ管理ス」と規定されている。『同治九年（一八七〇）庚午南風原間切惣耕作当日記』⁽¹⁶⁾「勤賦」に

一楮木仕立方并製法差引

右楮木当構

とある。

楮木の栽培については、「屋敷内又は場所見合」植付させ、本数を本立帳に記入して減少せざるようにし、だいたい二月楮取納後跡見と称して田地奉行が各間切を巡検した。

覚⁽¹⁷⁾

(前略)

一楮木之儀、新植并小木且古株切跡壅相用入見分候様、尤本立帳出入有之候はゞ相直置、構役々取調之上、印形可申請事 (中略)

右者今般耕作跡見之儀、来る廿日比出来、宿次無構此方見込次第可罷通候間、役々手配を以精々致下知、左候而右ヶ条外にも氣を付致下知可入見分候、自然不行届之儀も於有之は、各越度之程不輕咎候条、聊油断被致間敷候以上

午(明治三年)九月二日

田地奉行

保栄茂里之子親雲上

南風ノ宿中

下知役・検者・地頭代・惣耕作当・惣山当・楮木当

田地奉行からは、あらかじめ各間切役人へ次のごとく達しられた。

覚⁽¹⁸⁾

一棕櫚・小松・蘇鉄・楮木仕立方一件に付而者、跡々より段々被仰渡候得共、其汲受無之、諸間切一統大形有之候段被聞召、屹と取締を以植付させ、此上不行届所も候はゞ、頭役始役々代合為致候様、

此儀畢竟田地奉行役人下知方不行届筋ニ而不可然段、此節御物座より稠敷御沙汰之趣有之、於当座にも至極恐入罷在候間、件之趣得と得其意、夫々詮相立候手筋取締向等委しく吟味を以、来二十日首尾可被申出候、此段申渡候以上

未(安政六年)正月

田地奉行

小禄里之子親雲上

下知役・検者

地頭代・惣耕作当・楮木当

これに對して間切各村役人は次のような請書を提出した。

証文⁽¹⁹⁾

(前略)

一楮木仕立之儀、此程漸上納分、弁来事御座候処、夫程余勢無御座候間、猶以入念、家内々々并村余地見合植付させ可申候

右箇條之通、屹と入念植付盛生仕させ可申候、就中棕梠・楮木枯損有之候はゞ、主々にて則々植替仕候様取締仕置申候、若不束者も出来候はゞ、一本に科錢三貫文宛召行可申候、乍此上不行届候はゞ、我々其沙汰可被仰付候以上

未(安政六年)二月

間切役人に監督不行届があれば、間切内法によって処罰された。科銭は一本につき三貫文から五貫文が定例であった。

覚⁽²⁰⁾

一科銭二百貫文

南風間切各村

耕作当

同掟

宮城村耕作当

仲里にや

同村右同

与那覇筑登之

同村頭

新垣筑登之親雲上

但楮木仕立方致不下知候不届に付

一科銭二百貫文

与那覇掟

宮城にや

但右同為掟役右同断
一同二百貫文宛

但右同為構役右同断
一同五十貫文

但惣下知右同断
右腰書之通、不行届候付、間切内法召行候様被仰付可被下候以上
午（明治三年）

楮木当足夫地頭

仲里親雲上

楮木当大掟

宮城にや

地頭代足

仲里親雲上

検者

仲本里之子親雲上

下知役

大山里之子親雲上

薩摩藩における楮木の植栽状況をみると、正保・寛文年間（一六四四―七二）家老島津久通はこうぞの増植・改良に力を入れ、貞享元年（一六八四）には諸外城衆中・寺家・町屋敷等一ヵ所に五本ずつ、百姓は用夫一人に五本ずつのこうぞの植え付けを命じ、古楮・新楮共に本数を免帳に記し、元禄十年（一六九七）以後は検者をおいてその取締にあたせたという（鹿児島県史二巻）。琉球においては、植付本数の定めがあったかどうか明らかでないが「楮木之儀、新植并小木且古株切跡壟相用、入見分候様、尤本立帳出入（増減）有之候はゞ相直置、構役々取調之上、印形可申請事」（『近世地方経済史料』九卷八九頁）とあって、前述のように本立帳（免帳に相当する）をそなえ、楮取納後の二月ごろ、田地奉行以下構の役々が各間切内を巡検した。これはだいたいにおいて薩摩藩のやり方を取り入れたものである。東恩納村（美里間切）一地に対する賦課例をみると「楮皮一合八勺」（一年分）（『近世地方経済史料』九卷二二頁）とあって現物納であったことが知られる。

百田紙と芭蕉紙

すでに見てきたように、琉球において実に各種各様の紙が漉かれているが、その中で最も一般に親しまれ、かつ公用紙としての地位を獲得したのは百田紙と芭蕉紙である。百田紙は近世九州一円で漉かれ広く普及した紙であり、芭蕉紙は琉球特産紙である。『大与座規模帳』⁽²¹⁾（雍正八年制定、以後乾隆三〇年・同五十年各損益あり）を見ると、大与座で一年間に使用すべき紙名と数量を次のとおり規定している。

定手形⁽²²⁾

御用物座

一百田紙 貳束

右同

一はせを紙 四束

但年中座遣并生子帳調用

これらは御用物座から手形にもとずいて調達された。

国学・三平等学校所の公用紙も同様であって、一年分の使用量は次の通りである。

(国学)

一百田紙 一束余

一はせを紙 九束余

『具志頭間切御手入日記』⁽²³⁾(一八六一)に

一銭 七拾五貫文 百田紙三束

束に二拾五貫文づつ

一同 貳百貫文 わせう紙拾束

束に貳拾貫文づつ

但諸道具仕立

とあり、その市場価格が知られる。

百田紙は板本の料紙としても使用され、咸豊八年（一八五八）田名宗経・宗相板刻になる喜舎場親方盛元和解の『太上感應篇』は、ことに刀法に見るべきものがあり珍重されている。『梅姓家譜』に「右書物望の方は料紙百田紙六拾枚、入具代、分式貫文差出候へば摺調可相渡候」とある。これは板本が各処に現存する。知念績功の『芭蕉紙工四』は料紙の名をもって書名とした珍しいものである。

先島離島

久米島へは、はやく一七一二年に翁能哲が派遣され、養蚕及び製紙技術を伝えている。『中山伝信録』（一七二一）に「姑米山、産五穀及土綿・繭紬・白紙・蠟燭・螺・魚等物」といい、雍正十三年（一七三五）の『久米仲里間切公事帳』に「紙漉当、紙漉用之黒楮之儀、地合見合可植付場所所有之候ハバ、其村之頭・掟・目差江申談植付盛生させ紙漉調、所中之用事相達候事」とある。別に間切役人として紙漉文子二人をおく。ただし道光十一年（一八三一）の同公事帳には紙漉の事は見えない。

宮古蔵元（政庁）には紙漉方が置かれ、離島諸村の紙漉稽古、用具の調達まで行なっている。多良間島塩川村から蔵元の御問合方に宛てた文書に

紙漉簾二枚

右塩川村用古過難相用候間、御詔取届被仰付被下度奉存候以上

四月二日

御問合方

とある。「簾」(スダレ)は「簀」のことである。

八重山蔵元には石垣紙漉方と西表紙漉方の二方が設けられ、豊富な原料を用いて各色の紙が生産された。尤も製紙が本格化するのは雍正九年(一七三二)以降のことで、それ以前は生産費がかさんで本島購入より却てコスト高となった。このため種々工夫をこらし合理化をすすめてようやく雍正八年(一七三〇)生産単価の引下げに成功したからである。『参遣状』雍正八年の条に(今文意を明確にするため焼物一件を併記する)

覚

一 於其地致焼物候儀、夫丸太分入候ニ付而其爰元より差渡候より却而不勝手ニも可有之候哉、勿論土産仕出候儀ハ、所之重宝候間、作料旁相減候様ニ随分吟味可有之与申越置候、右ニ付而黒石川与申所、薪木并土取所便能有之、去年引移候ニ付夫丸相減候上、右かまニ蔵葺用之瓦も出来、旁以重宝仕出候間、弥相立度由頂上之至存候、以後諸品仕出重宝いたし候様ニ可被申渡候

一 紙漉調之儀茂人夫太分入候付而ハ、右同前ニ試被仰付置候、然者此程段々吟味仕漉調させ候ニ付而人夫相減、誂下よりハ代料も引入申候、尤紙之儀ハ嶋中当用物ニ茂御座候間、弥相立候而可然哉与奉存候

右之通相談仕奉得御差図候間、此旨宜御取成奉頼候以上

戊五月三日

八重山嶋在番

田島里之子親雲上

同

玻名城里之子親雲上

大城親方様 安里親方様

とあり、この上申書は翌雍正九年直ちに許可された。以後蔵元に原料・人夫等の基準量を克明に記した『紙漉方例帳』を備えしめ、生産費の高騰を防いだ。『例帳』の内容は実情に応じて時々改変されたが、それにはいちいち王府の許可が必要であった。咸豊八年（一八五八）の『紙漉方例帳』には、例えば百田紙・芭蕉紙について次のごとく定められている。

百田紙一束漉定之事

一生大和黒かち拾七斤貳合四勺貳才、干かちニメ六斤

一生黒かち二拾斤五合七勺五才、干かちニメ拾斤六合四勺

一すしやり三斤

一阿くつ灰一升五合

但雑木灰遣入候時者

一上夫七分七り、手叶

一同五分、かち上皮削（以下略）

わせう紙一束漉定之事

一千わせう皮拾三斤

一上夫五分、右皮切割

一薪木一束五合

一ひんかつら六斤

一右わせを并古苧縄之間三斤

一上夫二分五り、右縄切割

一同一人五分、手叶并わせう皮洗

一同五分、わせう皮煮

一紙細工一人、五分二り八毛

一石灰二升先

右『例帳』によって、紙名・原料・煮熟用薬剤・添加物（ねり）を左に摘記する。

紙名	原料	薬剤	添加物
杉原	筋かち	阿こつ灰	上餅米 すしやり
百田紙	大和黑かち 黒かち	阿くつ灰	すしやり

宇田紙	黒かち	阿くつ灰	す志やり
志ちやう紙	正黒かち	阿くつ灰	すしやり
わせう紙	干わせう皮 わせう縄又は 古芋縄	石灰	ひんかつら

(註) 「阿くつ灰」又は「阿こつ灰」は「灰汁アヅの灰」の意か。「上餅米」は「米糊」を作つてすぐときまぜるためのものである。

なお咸豊七年(一八五七)の『八重山嶋諸物代付帳』によると、その価格は

一杉原紙一束 代米貳斗五升起

一百田紙一束 代米七升起

一蚊張紙一束 同貳斗五升起

(注) 「蚊張紙」は「志ちやう紙」のことか
となっている。

唐紙の製造

唐紙というのは、普通に竹紙や藤紙などの中国産紙をさすことばであるが、汪楫の『使琉球雜録』に

「必購中朝毛辺紙以求（書）名唐紙」とあり、もとより琉球側からの呼称である。唐紙に関しては『球陽』尚穆十五年（一七六六）の条に「創造唐紙・印金紙・緞子紙」として簡単な記事がある。

首里大中村無譜知念筑登之親雲上（揚顯烈）、始造出唐紙・印金紙・緞子紙、以備国用之未備、由此停止寄買于他国焉

『新参揚姓家譜』によってくわしくみてみよう。

乾隆三十年（一七六五）從薩州収買之官府応用唐紙裝運楷船、偶遭逆風、其船損壞、所裝唐紙霉爛、皆不堪用、随即往各処、採取塗飾其紙之物料、方得製作、奉呈朝廷備覽、創製其紙以備国用、因蒙賜御物奉行褒賞章

同三十一年創製印金紙・緞子紙及各様唐紙、別記其価、俱呈朝廷備覽、其紙比薩州収買者、其色相同、価値亦賤、随即奉令如其所開具、每有官需、自応奉買其紙、以備国用
同年御書院御鎖之間・南風御殿及御在番所・那覇里主館、該当改糊唐紙、其所買者、已既流失、偶逢在番奉行代期促迫、專竭心力製、以備用、嗣後上司停止例年収買唐紙、令顯烈專製其紙、広備官私之需

同三十四年新製各紙物料、巡往首里隣邑、悉以取用、雖然所有者尚少、故恩許經過中頭・国頭等地方、查看山林川沢土石等物、若有応用者、逐一收拾、晒日浸水、和塗紙上、精製各様之紙併將所塗之物件、奉呈朝廷備覽、与其所買之物、毫無以異、其製加多、其用愈広（既准得弟子教其法、因將徒弟各名、記于小細工奉行所冊籍、毎年按功呈請、叨蒙賜位）

同三十五年官私応用唐紙、原係薩州収買、其所塗物件、自採取于各処製之、与実和製毫無以異、由是官私之用、並無欠缺、前此収買停、価値已亦賤、其以為便、其紙実交通和漢之需、關係不輕、其功可賞、因賜褒章等因、本年九月蒙(准)此

同四十年(前出引用文参照)

乾隆四十三年(戊戌)の条には「為褒賞事蒙賜新録、其文左記」として次の記録がある

寛享

唐紙師

知念筑登之親雲上

右者若年より諸芸に氣を附、万小細工類相嗜、細工物之御用相弁、且又唐紙・印金紙・緞子紙初而仕出、地紙・入具等之儀茂段々相試、御当地産物ニ而調出候処、位克有之、諸御用首里能相調、就中唐紙之儀、去戌年(乾隆三十一年丙戌)以来、毎年渡唐官府御用并脇方用を茂手広相弁候間、似合之御褒美被仰度旨願出有之、御物奉行申口江僉議申渡候処、唐紙之儀、御書院并御仮屋方御座張替又者年々渡唐官府用ニ付、御詔を以相調来、難被差欠品ニ候処、氣を付初而試出、代料茂下り代より引入候付、去戌年より大和御詔被召留、諸御用并世上之用を茂無断絶相弁、最早国用相定候、年数茂拾三年振ニ相成、其上万小細工之御用を茂相弁、為抽働候間、為御褒美、新家譜被成下可然旨申出、同意存申候間、其通被仰付被下度奉存候事

戌六月十五日

これで見ると彼が製したのは、和唐紙(唐紙に模した和紙)の類であって、いわゆる唐紙ではない。百田

紙や芭蕉紙を地紙として用い、その上に各種物料を和塗した一種の加工紙で、御書院などの「御座張替用」又は「渡唐官府御用」としての用途をもつものであった。「渡唐官府御用」というのは、進貢使等が渡唐赴京する際、沿道の「唐官人方（都堂や布政司など）へ土産として差遣」す品々の中に「唐紙二千百枚」など⁽²⁴⁾とあるのがそれであろう。

唐紙師は小細工奉行所に属し、三年⁽²⁵⁾詰であった。唐紙師になれば「毎年按功呈請」することが許され、「賜位」にあずかることも出来た。彼は乾隆三十四年唐紙師となり、翌三十五年直ちに呈請して褒章をうけているのはこのためである。

唐紙の技術を伝えたのは新垣仁屋である。

薩州移文云、慶良間島渡嘉敷村新垣仁也、上届申年（一七七六？）為内之浦直庫弥右衛門所僱、為其水主到本州、因在其中華肄習製紙之法、戊年（一七七八？）以来令試其所伝之法、果製諸品之紙、尽達公用、因令其永居本州⁽²⁶⁾（以下略）

彼がいかにして唐紙の製法を身につけたか明らかでないが、和船の水主に僱われているところを見ると、かつて進貢船などの船頭となって渡唐したことも考えられ、その際福州あたりで、たまたま伝授してきたものであろう。彼は「老母相見」のため一たん帰国したものと見え、乾隆五十一年（一七八六）薩州の命により、仲元筑登之親雲上とともに福州へ派遣された。各色の詩箋（詩を書く料紙、タテ約二三センチ・ヨコ約一三センチ、福州で産する連史紙（竹紙）に淡彩の山水花卉などを刷り出したもの）等の製法を学ぶためであった。

上届午年（一七八六）奉薩州令、本州応用物件到閩肆其製法、遵令仲元筑登之親雲上・新垣筑登之前到

閩省、学肆製粉朱及鍍五色之法、其外又肆製造各色之詩箋・蒸生鴨雞之法・鎔鈎陶器等法回来、去年（一七八七）夏到薩州、已經查試肆得、都好足備国用（以下略）⁽²⁷⁾

彼の薩摩移籍が決定したのはこの年十月で御納戸与力格として取り立てられ、名を新垣筑兵衛と改めて琉球版籍から除かれた。⁽²⁸⁾

唐紙の技術導入については、かえって薩摩の方が熱心であった。

於唐白唐紙漉様稽古可相成哉之旨、被仰渡候付、相成不申段聞役在番親方より被申上趣

一白唐紙之儀、福州にては漉調不申、二三里程も有之所より漉出申由候事

一右之所へ琉人差越、稽古は不罷成候事

一右ニ付福州にも右漉様存候者罷在、口伝迄にて稽古可相調哉、決ての儀、追申上由申出候事⁽²⁹⁾

技術者の素性

関忠男にしても翁能哲・揚顕烈・房弘徳などにしても、彼等は決して紙漉を専業とするものではなかった。関忠男は白糸・煮貝の法をもたらし、翁能哲は養蚕を伝え、揚顕烈は彫刻・刺縫等に巧みであった。房弘徳にいたっては、今日伝えられる堆錦塗の発明（一七一五）であまりに著名である。技術者の多くは下級の平民であり、返上物宰領又は渡唐役人或はその従者となって、公の命により薩州や福州を往還し、必要とあれば北京まで同道せしめた。『宿姓家譜』⁽³⁰⁾に

平田親雲上

右平田親雲上、御当地ニ而自身ニ焼物之薬色々仕出、勝手被罷有之候付、渡唐被仰付申候、弥彼是御為ニ可罷成様ニ心置稽古仕候様旨渡唐被仰付候、若し福建ニ而相不達候ハ北京迄召烈申様ニ而康熙九年（一六七〇）庚戌十月廿九日拙者へ被仰付候間、其趣奉得其意、北京迄同心仕候云々

以上

卯（一六七五）五月十五日

国吉親雲上

高良親方

こうして彼等は各種新技術の導入開発につとめ、国内を裨益し、その功によって土籍に列した。今日漆器や織物・焼物などに見られるすぐれた琉球の工芸技術は、これら身分低き技術者の手によってもたらされたものである。

球板と紙文化

すでに見てきたごとく関忠勇をもって始まる琉球の製紙は、ようやく一七〇〇年代（尚敬王代）に各色の紙が漉かれるようになり、一八〇〇年代（尚育王代）に入ってその頂点に達した。これにともない板刻などの印刷技術が急速に進展し、従来曆書などの官板（一六七四年、揚春栄が曆書を印行したのを始めとする）

のほかは、専ら開板地として福州や日本がえらばれる傾向にあったが、一八〇〇年以後板刻に適した強靱な百田紙などが大量に出まわることにより琉球において板本が盛んに作られるようになった。俗に球板と称するものには、『千字文』（一八三八）『童子摺談』『小学監本』『四書俚諺鈔』『四書集註』（一八四九）『感応篇和解』（一八五八）『漏刻樓集』『琉球詩録』『琉球詩課』（一八七三）などの一船啓蒙書や漢詩文集が多い。程順則が著わした『雪堂燕遊草』（一六九八）『六論衍義』『指南広義』（一七〇八）などはいずれも私板で福州で上梓された。和刻本の代表的なものとしては『四知堂詩稿』『琉球百韻』（一八〇六）『中山世譜』（一八三三）『東遊草』（一八四三）などをあげることができる。

（注）

- （1） 球陽研究会編『球陽』（角川書店）二一〇頁
- （2） 『近世地方経済史料』（吉川弘文館）十卷三五三頁
- （3） 『球陽』附卷尚敬五年の条、五九二頁
- （4） 『球陽』尚穆三十五年の条、三七二頁参照
- （5） 『琉球国旧記』『琉球国由来記』にも同文の記載がある。
- （6） 『球陽』五九九頁
- （7） 『中山王府相卿伝職年譜』に「尚貞王代康熙九年（一六七〇）庚戌十月二十五日任職（中略）、同二十九年（一六九〇）庚午十一月四日致仕、勤職二十一年」とある。『宿姓家譜』（比嘉朝健「琉球の陶器」所引）に、

宿監田平田親雲上典通が御進物用の玉馬を製作した際「夜白精力を尽すと雖も、出来兼ねるの故、三司官池城親方安憲が直々御尋ねにて、若し入ヶ間敷（費用）儀有りて調兼哉、何分造作御構無仕出す可由仰付らるるにより、夜白精神を励まし、玉馬仕出し、御目に掛け御用相済む云々」と見えて、安憲の督励があったこ

とを記している。

- (8) 『球陽』尚敬五年の条、二六九頁
- (9) 『沖繩一千年史』職制創設年表、四五六頁参照
- (10) 長尾雨山著『中国書画話』(筑摩叢書二七)二五九・二九九頁参照
- (11) 『球陽』尚泰十九年の条、五五四頁
- (12) 『球陽』尚育六年の条、四六二頁
- (13) 『球陽』附卷尚育十三年の条、六一一頁
- (14) 河原田盛美『琉球紀行』(明治九年)『沖繩県史』十四卷所収』には「一昨年(明治八年)清国へ進貢接貢
両船輸入輸出品斤高」(百田紙についてのみかかげる)として
大唐船輸出品
一、百田紙 千八百六拾束程
小唐船輸出品
一、百田紙 七百七拾束程
とある。
- (15) 『沖繩県史』十四卷所収
- (16) 『近世地方経済史料』九卷一〇七頁
- (17) 『同治九年(一八七〇)庚午南風原間切惣耕作当日記』『近世地方経済史料』九卷八九頁
- (18) 『咸豊九年(一八五九)乙未南風原間切惣耕作当日記』右同九卷九五頁
- (19) 右同九卷一〇三頁
- (20) 『同治九年(一八七〇)庚午南風原間切惣耕作当日記』右同九卷七七頁
- (21) 崎浜秀明編『沖繩旧法制史料集成』第二卷一四四頁
- (22) 『琉球藩雜記』(明治六年、大蔵省調)『沖繩県史』十四卷所収。

- (23) 『近世地方経済史料』九卷三四二頁
- (24) 右同、十卷三八八頁
- (25) 右同、三二七頁
- (26) 『球陽』附卷尚穆三十一年の条、六〇八頁
- (27) 右同尚穆三十七年の条、六〇九頁
- (28) 右同尚穆三十五年の条、六〇九頁
- (29) 『近世地方経済史料』十四卷一三頁、年次不詳
- (30) 宿藍田(平田親雲上典通)の家譜。五色玉上焼物薬を研究開発した。多くの作品がある。

琉球抄紙関係略年表

一三九五	乙亥	察度四六	洪武二八	応永二	蕉布を製する
一四五六	丙子	尚泰久三	景泰七	康正二	天尊廟の鐘を鋳る
一四五七	丁丑	四	天順元	長禄元	天妃・万寿寺等の鐘を鋳る
一四六五	乙酉	尚徳五	成化元	寛正六	○慶賀の使臣、造曆を学ぶ
一四六九	己丑	九	弘治五	文明元	相国寺巨鐘を鋳る
一四九一	辛亥	尚真一四	弘治四	延徳三	○比屋勢頭、烟花の薬法を学ぶ
一四九七	丁巳	二〇	正徳一〇	明応六	円覚寺巨鐘を鋳る
一四九九	己未	二二	正徳一二	明応八	梁能等、円覚寺石欄・地橋を督造する
一五〇九	己巳	三二	正徳一四	永正六	丹墀に石欄・竜柱を建てる
一五三一	辛卯	尚清五	嘉靖一〇	享禄四	おもろさうし巻一編集される

△ 薩摩伝来のもの
○ 中国伝来のもの
× その他

一五六二	壬戌	尚元	七	嘉靖四一	永祿	五	沢子等、奉神門の石欄を建てる 葛宜盛、石木奉行に任ずる
一五八八	戊子	尚永	一六	万曆一六	天正一六	一七	汪永沢、瓦奉行に任ずる
一五八九	己丑	尚寧	元	一七	一七		翁世思に螺赤頭奉行を授く 毛鳳朝に金奉行を授く
一六〇二	壬寅	一四		三〇	慶長	七	土白紙一佰束進献とある(宝案)
一六〇五	乙巳	一七		三三	一〇		○総官野国、蕃薯を帯び来る
一六〇九	己酉	二一		三七	一四		島津の琉球入り
一六一一	辛亥	二三		三九	一六		淀十五条示達される
一六一二	壬子	二四		四〇	一七		毛泰運に貝摺奉行を授ける △善濟、染色を教える
一六一三	癸丑	二五		四一	一八		おもろさうし巻二編集される
一六一六	丙辰	二八		四四	元和	二	△張献功、瓷器を教える
一六一九	己未	三一		四七	五		×盛元龍、養蚕を教える
一六二〇	庚申	三二		元	六		宮古・八重山に績織の房を建てる
一六二一	辛酉	元		天啓	七		△麻平衡、木棉を栽植する
一六二三	癸亥	三		三	九		○麻平衡、黒糖を製する おもろさうし巻三以下編集される
一六二七	丁卯	七		崇禎	寛永	四	△尚盛、茶樹をうえる
一六三一	辛未	十一		四	八		△運天、筆を造る
一六三二	壬申	十二		五	九		△平万祉、八丈織の法を教える
一六三四	甲戌	十四		七	十一		蔣世徳、翰書の法を伝える
一六三六	丙子	十六		九	十三		鬼利死丹宗門改めを行う(戸籍簿の作成)
一六四〇	庚辰	二十		十三	十七		寿帯香を造る
一六四一	辛巳	元		十四	十八		○貝摺師を設ける
一六四四	甲申	四		元	正保	元	△外間、磨刀の法を学ぶ △仲村渠、檜物師を学ぶ
一六四五	乙酉	五		元	弘光	元	薛礼興等、鬱金を植え、黒糖を製する
一六四八	戊子	尚質	元	永曆	慶安	元	芭蕉当職を置く
一六五〇	庚寅	三		二	三		向象賢、琉球世鑑を編修する
一六五六	丙申	九		十	明曆	二	△平啓祥、鳩目銭(当間銭)を鑄る
一六五九	己亥	十二		十三	万治	二	○国吉、浮織綴を織る

一六六〇	庚子	尚質十三	永曆十四	万治三	△李基昌、画法を学ぶ
一六六三	癸卯	十六	康熙二	寛文三	○陸得先、白糖・冰糖・漆器を学ぶ
一六六七	丁未	二〇	六	七	○楊春枝、曆法を学ぶ ○周国俊、地理の法を学ぶ 楊春榮、曆書を板行する
一六七〇	庚戌	尚貞二	九	十	○宿藍田、焼玉の法を学ぶ 諸士に系図の提出を命ず 土産の査紙、式万張進上とある(宝案)
一六七三	癸丑	五	十二	延宝元	口上覚(羽地仕置)出る
一六七八	戊午	一〇	十七	六	蔡肇功、時憲曆を板行する
一六八二	壬戌	十四	二一	天和二	陶窯を牧志の地に移す 宮城に蠟燭主取を授ける
一六八三	癸亥	十五	二二	三	尚貞の冊封使汪楫・林麟焜来琉
一六八六	丙寅	十八	二五	貞享三	関忠勇、杉原・百田紙をすく
一六八九	己巳	二一	二八	元禄二	御系図官を設ける
一六九〇	庚午	二二	二九	三	諸士に姓を賜い家譜を編せしむ
一六九二	壬申	二四	三一	五	△鄂承宗、裱褙法を学ぶ
一六九四	甲戌	二六	三三	七	×廖徴、塩を造る
一六九五	乙亥	二七	三四	八	○翁自道、黄薯を帯び来る 鄂承宗に裱具主取を授ける
一六九六	丙子	二八	三五	九	造筆役を設ける
一六九七	丁丑	二九	三六	十	蔡鐸、中山世鑑改修の命をうく 蔡鐸、歴代宝案第一集の重修をおこなう
一六九八	戊寅	三〇	三七	十一	程順則、雪堂燕遊草を福州で板行する
一七〇〇	庚辰	三二	三九	十三	識名盛命、思出草なる
一七〇一	辛巳	三三	四〇	十四	蔡鐸本中山世譜なる
一七〇六	丙戌	三八	四五	三	女官御さうし編集される
一七〇八	戊子	四〇	四七	五	○蔡温、地理を学ぶ 程順則、指南広義・六諭衍義を福州で板行
一七〇九	己丑	四一	四八	六	那覇由来記なる
一七一	辛卯	尚益二	五〇	元	造梳匠を置く 混効験集なる
一七一二	壬辰	三	五一	二	翁能哲、久米島等に綿・楮紙の製法を教える、この頃楮木欠乏す

一七二三	一七二四	一七一五	一七一六	一七一七	一七一九	一七二〇	一七二一	一七二三	一七二四	一七二五	一七二六	一七二七	一七二八	一七二九	一七三〇	一七三一	一七三二	一七三三	一七三四	一七三六	一七三七																
癸巳	甲午	乙未	丙申	丁酉	己亥	庚子	辛丑	癸卯	甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬子	癸丑	甲寅	丙辰	丁巳																
尚敬	元	二	三	四	五	七	八	九	十一	十二	十二	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二〇	二一	二二	二四	二五															
康熙五二	五三	五四	五五	五六	五八	五九	六〇	雍正元	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	乾隆元	二																
正徳	三	四	五	元	二	四	五	六	八	九	一〇	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	元文元	二															
るか	○蓄藏徳、鑄銭の法を学ぶ	琉球国由来記編集される	程順則の雪堂燕遊草和刻本なる	房弘徳、堆錦塗をつくる	安里、挑灯・雨傘を造る	蔡温、要務彙編を著わす	中山王府相郷伝職年譜なる	銅銭を鑄る	欽兆鳳等、芭蕉紙をつくる、紙の行政需要増えるか	芭蕉紙の製法を宮古・八重山・大島に伝える	山川村に紙漉場を設ける	王府、銀二百両を下賜して造紙の器具を備えさせる	尚敬冊封使、海宝・徐葆光来琉	五年に一次、諸士の家譜を仕次（追録）させる	中山詩文集なる	屋比久、銅を鑄て器物を造る	蔡温、中山世譜を改修する	房弘徳、色半紙・廣紙をつくる	蔡温本中山世譜なる	士家の諸細工（技術者）となるを許す	房弘徳、奉書紙・高檀紙・百田紙をすく	呉師虔、朱印色を製する	鉄匠屋宜、鉄轡を造る	勞維達、銀朱（朱墨）を作る	諸郡邑の人、公司の匠夫となるを禁ずる	宮古・八重山役人の家譜を纂修させる	蔡宏謨等、石灰を焼く	系図座規模帳なる、大興座規模帳なる	陶窯を湧田に造る	琉球国旧記なる	蔡温、教条を發布する	褒美物規模なる	金奉行を小細工奉行と改名する	御用物座を設ける	蔡温、農務帳を公布する	○向得礼、糸機織の法を学ぶ	蔡温、仙山法式帳・山奉行規模帳を公布する

一七四一	辛酉	尚敬二九	乾隆六	寛保元
一七四二	壬戌	三〇	七	二
一七四五	乙丑	三三	十	二
一七四八	戊辰	三六	十三	元
一七四九	己巳	三七	十四	二
一七五六	丙子	尚穆五	二一	六
一七五九	己卯	八	二四	九
一七六二	壬午	十一	二七	十二
一七六六	丙戌	十五	三一	三
一七七四	甲午	二三	三九	三
一七七五	乙未	二四	四〇	四
一七八二	壬寅	三一	四七	二
一七八六	丙午	三五	五一	六
一七八八	戊申	三七	五三	八
一七九八	戊午	尚温四	嘉慶三	寛政十
一八〇六	丙寅	尚顯三	十一	文化三
一八三二	壬辰	二九	道光十二	天保三
一八三八	戊戌	尚育四	十八	九
一八三九	己亥	五	十九	十
一八四〇	庚子	六	二〇	十一
一八四三	癸卯	九	二三	十四
一八四四	甲辰	十	二四	元
一八四六	丙午	十二	二六	三
				弘化

寶洪勲、鉄・銅の器物を鑄る 房弘徳、蘆紙をすく
 ○金城、桐樹を栽植する
 球陽なる
 宮古島旧記なる
 蔡温、独物語を著わす
 黄竜綴の涼傘を造る
 豊川英正、六論衍義を和解する
 大島筆記なる
 揚顕烈、唐紙・印金紙・緞子紙を創造する
 朱塗・木地引等の匠を薩州に遣わす
 褒美・科律主取をおく
 新垣筑登之、唐紙を薩州で漉く
 新垣筑登之を薩摩に移籍する 褒美・科律を編成する 新垣
 筑登之、閩に到り詩箋の製法を学ぶ
 新垣筑登之の家、世々御納戸御小人となる
 国学・郷学を建てる
 楊文鳳の四知堂詩稿和刻本なる 久志親雲上の琉球百韻和刻本な
 る
 中山世譜和刻本なる
 千字文板行
 国学・平等学校において「童蒙須知」を修身書として使用する
 榕蔭癡翁（毛樹徳喜舎場親方盛元）、太上感應篇之大意を著わす
 比嘉筑登之、百田紙をすく 紙漉場を首里宝口に移す 楮木の栽
 植はじまる 紙座設置される
 尚元魯・鄭元偉・魏学賢共編東遊草和刻本なる
 馬執宏童子撫談開板
 金城筑登之、紙座において上紙・下紙・百田紙・美濃紙・宇田紙・

一八四七	丁未	尚育十三元	道光二七	弘化四	杉原等の紙をすく
一八四八	戊申	尚泰元	二八	嘉永元	国製の紙を用いるを許す
一八四九	己酉	二	二九	二	製紙の屋を添え造る
一八五八	戊午	十一	八	安政五	小学監本・四書俚諺鈔・四書集註板行
一八六〇	庚申	十三	十	万延元	梅帶華(田名宗経)、百田紙にて太上感応篇和解を板行
一八六三	癸亥	十六	二	文久三	漏刻樓集板行
一八六六	丙寅	十九	五	慶応二	唐榮儒士の詩文筆業を試す
一八七〇	庚午	二三	九	明治三	宝口製紙の区を公有化する
一八七二	壬申	二五	十一	五	宜湾朝保、沖繩集和刻本なる
一八七三	癸酉	二六	十二	六	絵を学ぶ人の業を試す
一八七五	乙亥	二八	元	八	琉球詩課・琉球詩録開板
一八七六	丙子	二九	二	九	表具師主取両名をおく
一八九〇	庚寅	四三	一六	二三	沖繩集重刻
					宜湾朝保、松風集刊行